

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 坪井 祐司

マレーシアは典型的ないわゆる複合国家であり、それぞれ異質な文化・社会を有するマレー人、インド人、華人が併住する国家である。諸民族の統合による民族国家の形成は、独立以来、マレーシアの抱える最大の国家的課題である。本論は、「土地の子」として概括され、外来二民族に比して専論されることの少なかったマレー人概念の形成を論ずる。

第1章では、英領マレーで実施された各種センサスにおける民族分類概念の変化を追跡する。19世紀末には、華人、インド人、マレー人という在住民族の3分類が確定していた。しかし、植民地当局のマレー人概念には、半島マレー人をさす狭義のマレー人と、現在の東マレーシア、インドネシアなどマレー半島出自のマレー系民族をまとめた広義のマレー人という二重性があった。

第2章では、このマレー人概念の二重性が在地の管理体制の変化にどのように照応していくかを分析する。新開地スランゴル州では、さまざまな地方から多様な移民が渡来してきた。植民地末端地方行政の長はプンフルと呼ばれ、本来は現地人の有力者であった。しかし、植民地当局はゴム園労働力の定着のために、外来集団の長をプンフルに任命し、在地社会の管理責任をもたせた。移動的な外来マレー人も、その土地に定着し、管理されるマレー人と観念され、マレー人概念が著しく拡大した。植民地統治に適応した外来マレー人がその出自にかかわらず、マレー人として統括される秩序が生まれたとする。

第3章では、新たに植民地によって創出されたマレー人が半島の社会秩序の基幹として育成される過程が、植民地当局の政策及びスランゴルでの対応を通じて論じられる。植民地下におけるマレー人優遇策として、自給稲作農民の保護を目的とするマレー人保留地制と、マレー人を秩序の主体とするマレー人エリート育成策が積極的に講じられる。ムラユ王権と植民地権力との合作により、マレー領域内に定着する「土着的」なマレー人という言説が生まれた。

第4章では、再びスランゴル州の事例に戻る。スランゴルでは、上述の土着的マレー人概念の形成とともに、プンフル職はスランゴル出生のマレー人に限定された。従来の外来マレー系集団の長はプンフルに従属するクトゥアカンボン（ムラの長）に任命され、行政末端に参加することによって、マレー人概念の中にとりこまれていった。結論では、植民地における移動型社会から領域型社会への移行にともない、土着的、定着的なマレー人言説が生まれたとする。

本論は現代の言説を相対化するものとしての歴史学の意味を遺憾なく発揮している。従来のマレー人、華人、インド人の枠組を越えて、マレー人と概括された集団の形成を細かく分析した学術史上の意味はおおいに評価できる。また植民地期史料の分析も、地域を限定した結果、緻密で瑕疵がみられない。なかんずく、マレー人形成にいたる論理展開は、きわめて説得力がある。

一方で、植民地という国際経済関係の中に位置づけられた社会の中の民族概念の分析としては、イギリス植民地政策全体からのアプローチがなく、またマレーシア内に限っても、マレー人概念の成立に決定的であった華人、インド人概念への考察が不十分である。しかし、これは本論によって得られた貴重な知見を基礎にして、はじめて本格的に展開されるものであり、致命的な瑕疵ではない。

よって、審査委員会は本論に対し博士（文学）の授与に相当であるという判断に達した。